

---

# 嘔吐少年と探偵部

日高鳴海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘘吐き少年と探偵部

### 【Nコード】

N8832Z

### 【作者名】

日高鳴海

### 【あらすじ】

やあ、初めまして興津惣介です。この物語は主人公である僕が今の時のライトノベルのようにチートな能力を持ち、最強の運動能力に天才的な頭脳、そして様々な女の子にモテモテモテまくる物語です。

冗談だけだね。

## プロローグ

僕の名前は興津惣介　おきつそうすけ。  
どこにでもいる普通の高校生だ。中肉中背で勉強も中クラス。

そんな平凡な僕には幼なじみがいる。幼なじみは絵に描いたような優等生でいつも僕を起こしにくる厄介な存在だ。

友人には悪友に女友達。女友達はサバサバしていてなかなか仲が良  
いと思う。女友達も結構な美少女であるが男らしい面があり女の子  
の憧れの的だったりする。

僕が通う学校の生徒会長は学校のアイドル的な存在で、非公式ファ  
ンクラブも存在する。生徒会長は僕の従姉で、凜とした雰囲気を持  
っているが僕と一緒にいる時は甘えん坊で困ったものだ。

クラスメートの委員長は僕が女の子と話していると強く当たったり  
してくるツンデレな女の子。

委員長も美少女であり、眼鏡もとても似合っている。

クラスの担任は僕と血の繋がった実の姉であり、担任も僕に甘えて  
くるブラコン姉で、僕に依存した傾向があるため、そろそろ弟離れ  
も必要なんじゃないかなと思う。

最近転校してきた金髪の美少女は滅茶苦茶胸がデカイ。外人だとフ  
レンドリーな人が多いらしく、転校生も例外ではなくよく僕の背中  
に引っ付いてきたりする。

僕の周りには女の子がいっぱい。

最高！ ハーレム生活！

美少女に囲まれたこんな日常。  
それが僕の日常だ。

冗談だけだね。

## 第一話

「あー、暇ねー……」

「それ程平和って事じゃないか。良いことだよ」

机にうつ伏せながら、梨子さんはつまらなそうに呟く。

僕たちがいる場所は三階建ての二階にある図書館の隣にある本の物置。

物置といっても部屋すべてが本で埋め尽くされているわけではなく、段ボールが数箱横にあるくらいで、普通に部屋として使用可能だ。

「そうだけどさ……平和すぎるとせつかく探偵部を作った意味ないじゃない」

探偵部。

それは今年の春に井上梨子が創立させた部活名だ。部長井上梨子。部員一興津惣介。以上。

過去に僕たちは連続殺人犯を見事な名推理で解決し、僕たちの存在はこの羽山高校内では知らない人が居ないくらい有名人になった。

冗談だけどね。

「はあ……暇ねえ」

「そうだね。あ、梨子さん」

「なに？」

「この本面白い」

「……どんな本なの？」

お、食いついてきた。

「ドロドロの昼ドラのような恋愛小説。一人の男と二人の女が……まあ、取り合ったりしている小説」

「……本当に面白いの？」

「冗談だよ。すつげえ面白くない」

「あーあー、でたでた。惣介の口癖」

呆れた声色が梨子さんの口から出てくる。

口癖、仕方がないじゃないか。冗談を言うのは僕のキャラ何だから。

「いつつもどうでもいい嘘つくわよね」

「良いじゃないか。誰にも迷惑をかけていないでしょ」

「まあ、そうだけど……」

「……僕が話しかけたのは本の事じゃない。良かったらこれをやらないかと思ってね」

後ろの古いタンスから盤と駒を出す。

「将棋？」

「うん、これなら暇つぶし位にはなるよ。それに頭使うから頭の体操にもなると思うし」

「なるほど……わかったわ」

少しだけ乗り気になった梨子さんは身体を起こし、僕が将棋盤と駒を並べるのを待っている模様。彼女の中では自分で並べるという考えは一ミクロンも無いようだ。

僕が駒を並べ終わると、

「始めるわよ。あ、何か賭けしながらやらない？」

「賭け？ マネーとか？」

「ええ、その方がやる気が出ると思うから。で、どうする？」

「別に構わないよ。僕は損しないしね」

「言ってくれるじゃない……！ いいわ、何円賭ける？」

さて、どうしよう？

僕の財布には諭吉が十枚ほどあるんだよね、冗談だけど。

本当のことを言うと福島県生まれの黄熱病原研究をしていた偉人が二人眠っていて、小銭は百円四枚と五円玉二枚、一円玉九枚ある。

我ながら小銭の使い方が下手くそだなあ。

とりあえず最初だから、こんな物にしておこう。

「じゃあ百円から」

「へえ、無難ね。私も……ホイ」

チャリン、と机に百円を置く。

さて、始めるか。

「……」

梨子さんは将棋盤を睨みつけるように見ている。理由は今の勝負状況にある。

僕は将棋を割と嗜んでいて、自分で言うのもあれだがなかなか強いと自負している。

さて、本題に入ろう。

はつきり言つと梨子さんの駒は王将しか存在せず、周りには僕の駒が死角なしに取り囲んでいて、王将を動かした瞬間、梨子さんの王将が僕の物になるだろう。

しかも、梨子さんの持ち駒はゼロであり、十割敗北が決まった試合。

「で、どうするの？ 君の負けは決まっているけどね」

「……」

「いやあ、百円儲けちゃったなあ 悪いね梨子さん」

「……だ」「え？」

将棋盤の端を持ち小さく何かを呟いた。  
と、いきなり信じられない行動をしてきた。

「うわああああ、地震だああああ」

限りなく棒読みに近い声で端を持っていた両手を左右に揺らし始めた。

「ちょ、なにやってんの梨子さん！」

「……ふう」

揺らし終わった梨子さんは何故かやり切った感を表情に出しながら制服の袖で前髪を上げ汗を拭いている仕草をする。



あーあ、駒が床に転がっちゃってるよ。

「いやあ、まさか地震が起きるなんてー。不幸すぎたわね。これじゃ、もうあの局を続けることは無理ね。じゃ、仕方無いからもう一回やりましょうか」

「……もういい」

多分これ以上将棋を続けても無限ループだろう。続けても無意味だ。

「そう、しかし頭を使いすぎて疲れ」

僕が床に散らばった駒を拾い集めていると、ふと梨子さんの声が不自然に途切れた。

「ん？ どうしたの？」

「……人が、人が落ちてきた……」

「え？」

耳を疑う発言が梨子さんの口から出てきて、その発言を確かめるために窓から下を見る。  
下には……

「……夢に出てきそうだね」

「……」

……グチャグチャになった死体が、そこにはあった。校庭にいた生徒が下で大騒ぎ。

「……投身自殺、かしらね？」

「……多分ね」

爪を噛みながら小さく、弱く呟く梨子さん。

投身自殺。

そうとしか言えないだろう。

ドラマや漫画のように他殺だ！　なんて事は無いと僕は思う。

「今日は帰ろうか。警察が来たら帰りづらくなるし」

「……そうね」

梨子さんは同意し、バッグを持ち部室を後にする。

## 第二話

次の日。

僕が通う羽山高校は全校集会が行われた。

昨日転落死をしてしまった生徒は二年三組所属だった笹木高義。

この名前を知らない人は居ないのかもしれない。笹木高義は男から妬まれるような容姿を持った男で、女子達からはアイドル的な存在だったりする。

学力も高く、運動も出来る完璧超人。欠点なんて存在しないと思われるが、変な噂もある。

それは自分のルックスを生かし、複数の女の子と交際をしている、という噂。

モテない男子が笹木高義の好感度を落とすために流した、という事になっているのだが。

全校集会では亡くなった笹木高義へ合掌や黙祷したり、屋上の使用を全面禁止などという話しをして終了となった。

全校集会が終わったら、今日は授業せずに帰宅ということらしい。しかも三日休校になるようで、学校へ入ることも禁ずるみたい。

自宅に帰って寝ようかな。

ゲームのし過ぎで眠いんだ。

と、思っていたのに。

「どうもおかしいのよねえ」

「そうだね。おかしいよ君が僕の部屋に居るなんて」

僕は普通の二階建ての家に住んでいて、家族構成は父に母、そして僕の三人家族。父と母は共働きで昼間には二人とも居ない。つまり、僕と彼女しかこの家にいない。

「別に良いじゃない。暇なんですよ？」

「暇じゃないよ。僕にはやることがあるんだ」

「なによ」

「睡眠」

「それでね、笹木高義が」

無視……っ！ 圧倒的な無視……っ！

まあ、眠いの件は冗談なんだけどね。

実は僕の家には先回りしていた梨子さんに捕まったのが事実。

「自殺じゃないような気がするのよね」

「根拠は？」

「女の間」

だめだこりゃ。

根拠を女の間で片づけるなよと思う。

「冗談よ。たまには嘘を吐かされる気分になりなさい」

「うわー、嬉しい気持ちだあ。ありがとう梨子さん」

「いだだだだだっ！ 言ってる事とやってる事が全く違う！ 痛

い！ 謝るからグリグリ攻撃止めて！」

満面な笑みを浮かべながらクレヨン×んちゃんのお仕置きのような攻撃をやり続ける僕。

自分が冗談を言うのは良いけど、他人がやるのは不愉快だ。これは冗談じゃないよ。

僕は渋々解放すると、梨子さんはグリグリされた箇所をさすりながら涙目で睨みつけてきた。

「で、本当の根拠は？」

「あんな事してから普通に話しかけるのねアンタ……まあ、寛大な私は許してあげるわ」

小さい発育なんてあるのか、というべったんこな胸を張り威張る。

「根拠……いや、違う。疑問点何だけど、何故笹木高義は屋上から飛び降りたか、なのよ」

「自殺したかったからじゃないの？」

「……仮にそうだとして、わざわざあんな高い所から飛び降りなくても、三階の窓からでも一発で死ぬだろうし、トイレから落ちても死ぬ。こんなに選択肢があるのにどうして……」

……確かに、わざわざあんな場所に登って死ぬ意味が分からない。  
トイレの窓は高校生が一人潜れる位の大きさに、落ちようとすれば簡単に落ちれる……。

「それに屋上は常に解放されていた訳ではないのよ」  
「……」

「天文部と先生だけが屋上の鍵を使える……つまり」

「誰も屋上に足を運べる訳じゃない」  
「その通り」

そう言えば屋上に行こうとする人を見たことが無い。

何だかよくわかんなくなってきたな。それ以前に天文部なんて部活があつたことが驚きなんだけれどね。

「そこで……」

梨子さんはバッグの中を漁り始め、何かを探しているみたい。

「これよ」

梨子さんは一枚の紙を一人暮らしに役に立つような小さめのテープルに差し出してきた。

「……梨子さん」

「なに？」

「個人情報を盗む事は犯罪ですよ」

出してきたのは一人の女子生徒の個人情報。

白黒コピーの為、ブチている所も多少あるが、あまり気にならない程度だ。

「まあ、お父さんのパソコンからちよろちよろつとね」

「お父さん……？ お父さんも犯罪者なの？」

「もっ、て私も犯罪者前提で話ししないでよ。私のお父さんは校長よ」

「……」

いきなりのカミングアウトに僕は目を丸くする。そう言えば校長先生の名前は井上恭二だったか。よくある名字だったら気にも留めてなかったな。

「意外と楽勝だったわ。昨日お父さんは色々忙しかったみたいだしね」

「……で、この女子生徒がどうしたの？」

「この子が、唯一の天文部部員なのよ！」

天文部は一人しか居ないのか……。

一人しか居ない……つまり彼女が生徒の中で唯一屋上に行ける人物。

「これには住所も書いてあるし、お邪魔してみない？」

「……嫌だ」

「ええ！？ 何だかいい感じに進んでたのに！？」

ガーン、とショックを受けたような表情になる梨子さん。

「冗談だよ。行くなら早く行こう」

「~~~~~ッッッ！！」

地団駄を踏む梨子さん。どうやらめちゃくちや悔しいらしい。

僕は部屋のドアを開けようとした刹那、身体を右に寄せた。

ゴン！ と梨子さんはドアへと熱いキスをする。

「何やってんの？」

「さっきやられたグリグリ攻撃をしてやろうと思って……何で避けるのよ！」

「痛いからだよ」

「私だって……私だってやり返す権利はあるはずよ！」

そう言って梨子さんは僕に襲いかかってきた。

が、僕は再びそれを回避する。

「早く行かない？ 日が暮れちゃうよ？」

「ぐうう……！ 何時かやり返してやる……！」

怨念じみた声をBGMを聞き流しながら僕は家を出ていった。



### 第三話

徳山香織。

羽山高校二年一組所属。

成績はあまり思わしくないが、体育はずば抜けた部分がある。  
部活は唯一の天文部。

「ふむ……」

僕は徳山香織さんの家に行く道のりで梨子さんが盗んだ情報を確認しながら僕は理解するように頷く。

この個人情報だだ漏れの紙には残念ながらスリーサイズは書かれていないが、必要最低限の情報は全てこの紙に記されていたりする。

彼女の家は僕の家から大体十分やそこらで行けるなど、意外と近所に住んでいる事がわかった。

「徳山、徳山、徳山………あ、ここね」

表札には徳山と書かれていて、住所も一致している。

ここか。徳山香織さんの家は何処にでも有りがちな普通の二階建ての家で、庭には大きめの柴犬が犬小屋にてスヤスヤと寝ている。

梨子さんは躊躇うこともなくインターホンを押す。

ガサガサガサ、と電子音がインターホンから聞こえてきたかと思うと直ぐに女性の声が聞こえてきた。

『どちら様でしょうか?』

「私は羽山高校に通う香織さんの友人の井上梨子と申します。香織さんはいらっしゃいますでしょうか？」

真顔で嘘を発する梨子さん。嘘つくのは僕の専売特許なのになあ。

『香織は今風邪で寝込んでいまして……』

「あ、そうなんですか。付かぬ事を伺いますが、いつから風邪をひかれていますか？」

『三日前からですけど……それがどうかしました？』

「いえ、特に意味は。では、香織さんにお大事にとお伝えください」  
『わかりました』

インターホンが切れる音が聞こえた。

どうやら上っ面だけの会話が終了したようだ。

「う、うがアアアアア！！ 痒い！ 身体中が痒いイイイイイイ！！」

突然叫びだしたかと思えば背中やら腕やら身体のあるあらゆる箇所を掻き始めた。ちなみに、激しい動きをしている所為なのかパンツが丸見えだ。白と水色のシマシマのパンツなんて二次元だけの産物だと思っていたよ。

「どしたの？」

「慣れない敬語を連発したから滅茶苦茶痒いのよ！ あー、痒い！」

敬語アレルギー。

どこのキャラ設定なんだよ。まあ、僕も人の事言えないんだけどね。

「で、背中を掻いてないで早く立って。端から見たら不審者だよ」

「え、ええ」

未だに痒いのか、腕を掻きながら立ち上がった。

「なる程ね」

一旦僕の部屋に戻った僕達は一息をつく。

だが、梨子さん。何なる程なんだ？

あの会話で分かった事なんて殆ど無いと思うんだけど。

まあ、とりあえず聞いてみようかな。

「何が分かったの？」

「そんな事も分からないの？ バカねえ」

まるで出来の悪い息子を持ったかのような哀れみを含んだ目で僕を見ってくる。

失礼な。僕はね、中学時代には模擬試験全国一位を取ったことあるんだぞ。冗談だけどね。

「で、そんなバカな僕にとおっても分かり易く教えてくれないか？  
何が分かったかを」

「うん、まず分かった事は徳山香織は犯人である確率が格段に減っ

たこと」

…… ああ、何となく言いたいことが分かった気がする。

「徳山香織は三日前から風邪で学校を休んでいる。転落事故が遭ったのは昨日。つまり、笹木高義が死んだ日は徳山香織は居なかったことになる。まあ、あの母親の話しが本当ならね」

「嘘は吐いてないと思う。風邪を引いてる引いてないどちらにしろ、徳山香織さんは家から出れないと思う」

「どうして？」

「多分徳山香織の部屋は二階だ。熊や猫のぬいぐるみが外から見えたからね」

「冗談じゃないわよね？」

「当たり前さ。僕は世界一の正直者だよ？」

「今！ 今酷い嘘を吐いた！」

酷い嘘とは心外だな。

僕はわりかし良い嘘を吐くと思うんだけど。

あ、嘘って言っちゃったよ。

「話しは続けるけど、一階には母親がいて外に出るのは無理。二階から降りようとしても怪我してしまうかもしれない」

「でも、ロープが何かしらで下に降りれるかもしれないじゃない」

「よく考えてみ？ それ以前にだ。わざわざ体調が悪い日を使ってまで笹木高義を殺す意味じゃないか。風邪引いてると頭の回転が鈍って変なミスするかもしれないじゃないか。僕だったら身体が完璧な体調の時に実行するね」

「た、確かに……」

笹木高義が他殺という話で進めているが、本当に他殺なのかも悩

ましい所だけど。

「ん……分らないわね」

「これって本当に自殺なんじゃないの？」

「そんな事無いわ！ これは絶対に他殺よ！」

「根拠は？」

「私見たのよ……落ちた瞬間、顔が血で赤くなっていたのを！」

グワツ！ と驚かすような仕草で僕に言う。

……………。

「気のせいじゃない？」

「気のせいじゃないわよ！ 私動体視力は良い方なのよ？」

「……………」

「全然信じてないわね……じゃあ、証拠を見せてやるわ！ 惣介！」

何だか久々に僕の名前が出て来たような気がする。僕の名前は興津惣介だよ。忘れないでね。

「なに？」

「庭に出なさい。あ、ボールある？」

「うん、軟式ボールなら」

「そのボールにマジックで何かを書いて、投げたボールを見て何を書いたか当ててみせるわ」

「……………」

まあ、付き合ってやろうかな。僕はボールの側面に適当な日本語を書いて、梨子さんに見せないようにボールをポケットに入れ、庭に向かう。

「さて、投げなさい惣介！」  
「はいよー」

庭に來た僕達は居間の部屋の窓を開け、そこに座る梨子さんに、僕は自宅のコンクリートで出来た壁に軟式ボールを投げた。軟式ボールはコンクリートに叩き付けられ、コロコロと少し転がる。

「憂鬱、ね」  
「……おお」

僕は素直に感服した。軟式ボールを拾い上げ、僕は梨子さんに軽く下投げで渡す。

軟式ボールを受け取った梨子さんは確認するように軟式ボールを見た。

そして確認したかと思えばドヤ顔を僕の方に向けた。何だか無性に腹が立つ。

「どうよ、これで信じてくれるかしら？」  
「……まあ、そう言うことにしておこうかな」  
「やーい、悔しいんでしょー　って、いだだだだだだ！！　グリグリしないで！　ゴメンナサイ！　調子に乗りすぎていましたアアアアー！！」

グリグリ攻撃をし終えた僕は居間に座り込む。

さて、本当に梨子さんの動体視力は凄いのかもしれない。その動体視力を信じるとして、顔が血で赤くなっていた……もしかしたら屋上で頭でも殴られたというのか？

だったら、血が屋上に付いているはず……だが、ニュースでは自殺と報道されていた……。

血を完璧に拭き取った……？

「ねえ梨子さん」

「……何よ」

うわぁお。不機嫌度MAXじゃないか梨子さん。  
まあ、気にしないで僕は話を進めよう。

「屋上って今行ける？」

「屋上……いや、確か警察の人が屋上を立ち入り禁止にしているはずだけれど……」

「ってことは今は無理？」

「うん、無理だと思う」

「じゃあ夜は？」

「夜！？ うーん……多分大丈夫だと思う……何でそこまでして屋上に？」

「ちよつと確かめたいことがあつて……」

首を横に寝かせるように傾げる梨子さん。

どうやら僕の意図を捉えきれていないようだね。

「私も行ってもいい？」

「うん、むしろ居てくれた方が都合がいいし」

「……？」

## 第四話

夜になり、僕は親が寝静まった後家を後にする。説明するのも面倒だし、間違い無く反対されると思うし。

外にある自転車を走らせ学校へと向かう。

梨子さんには家を出る前にメールしたし、ある程度の時間になったら来るだろう。

「ふう、いい風だなー」

自転車の走ることによって発生する向かい風を全身に浴びながら僕は呟く。春の夜は少しだけ涼しく、常にこの温度なら嬉しいんだけどなあ。

そんな事を思いながら自転車を走らせる事一〇分弱。

校門前に来た僕に光が照らされる。

「遅いわよ惣介」

「来るの早いね」

校門には既に梨子さんがスタンバイしていた。

懐中電灯を装備していて、それを僕に当てているみたい。

「そりやそうよ。メール来た瞬間に家を出たんだし」

「ふうん」

確か梨子さんの家って歩いて五分位の場所にあるって言っていたし、そりや早いよね。



「んじゃ、行きますか」

「ええ……どうやって入るの？」

「そうだね……」

校門の門は閉じられていて、学校を囲む塀もあるため何時もの通り軽く通れる訳じゃない。

こうなると、やっぱり方法は一つだね。

「登ろうか」

「え？」

僕は門をよじ登り、校舎の中へと潜入する。

梨子さんも続くように門をよじ登る。

「さて、どうやって校舎へ入るか……梨子さん、どこか入れる場所とか知ってる？」

「その辺は抜かりは無いわ。鍵持ってるし問題ないわ」

威張るように鍵を懐中電灯で僕に見せてくる。

校門の鍵も持っていて持ってほしかったな。

「それなら問題ないね。よし、校舎に入ろう」

僕と梨子さんは昇降口に歩いていく。

鍵を開け、行儀よく下履きに履き替え暗い廊下を歩いていく。

「ね、ねえ惣介」

「なに？」

「ど、どこに行くの？」

怖いのか、僕の服を握りしめながら弱々しく僕に訊いてくる梨子さん。

ああ、そう言えば行く場所を伝えてなかった。  
伝えておかなくちゃな。

「屋上」

「屋上？」

「うん、もし梨子さんの言うとおり笹木高義の頭に血が流れていたとしたら、屋上に笹木高義の血が付着しているかもしれないしね」

「で、でも……屋上は警察の人が調べたってお父さんが言ってたわよ？」

「警察は多分自殺前提で捜査していたと思うし何か見落としている所があるかもしれない」

「……警察ってそんないい加減だとは思っただけ……」

「まあ、一応の確認だから。無かったら無かったで仕方ないと思う」

実際に警察はいい加減なのかもしれない。

普通人が死んだらこんな早く校舎を開放するとは思えない。

やっぱり警察は自殺ということを前提にして捜査していたんだと思う。

この分だと期待できるかもしれない。

僕は特に会話も無く暗い廊下をコツコツと歩いていく。

屋上には三階の階段を登って行かなければならない。

「あ」

「どっ、どうしたの惣介」

「屋上の鍵って無くても大丈夫かな？」

「大丈夫だと思うわよ。しばらく開放されるみたいだし……」

「そっか、なら安心だね」

それを訊いて安心した。

その後も歩き続け、屋上へと続く階段を登り屋上のドアの前まで着く。

屋上のドアの前にはテレビドラマなどでよく見る黄色いテープみたいな物が貼られていた。

僕と梨子さんはテープを潜り抜け、屋上へと出る。

屋上はコの字になっている柵に一つ椅子があるだけ。

「……暗くてよく見えないわね」

梨子さんの言うとおりだ。暗くてよく見えない。

僕は片膝立ちになり屋上の地べたに手を置く。

屋上の地面はトイレのようなタイル式になっているようで、タイルとタイルの隙間には水を吸収する地面になっている。

「……よし、探そう」

「なにを？」

「血を」

「……あるの？」

「分からないけど、血が染み着いているかもしれないじゃないか」

「そんな後があったら警察が見つけてるわよ」

「確かにね、でももしかしたら見逃しているのがあるかもしれない」  
「……そうかしらね」

半信半疑な状態で梨子さんは地べたを身体を下ろして見始めた。

僕も早くしないと。

探すこと一時間。

屋上は無駄に広く探すのに手間がかかる。

うーん、やっぱり無いのかなあ……。

携帯電話の光だけじゃキツイし。バッテリーもかなり減るし。家に  
懐中電灯が何故無かったのだと今更ながらに文句を言いたくなる。

「……ん？」

ふと僕はあることに気づく。

おかしい。

最初は気がつかなかったが周りと比べると微妙にこの隙間の色が違  
う……。

「ねえ梨子さん。ちょっと来てくれない？」  
「えーっ？ なにー？」

腰を叩きながら歩いてくる。ずっと屈んでいたから腰が痛いらしい。それは僕も同じだけどね。

「どうしたの？」

「ちょっと懐中電灯貸してくれない？」

「うん、別に構わないけど」

僕は懐中電灯を受け取り色が違う箇所を照らした。そこは屋上のドアより二メートル程離れた場所だ。

「僕の気の所為かな？ 梨子さんはどう？」

「……微妙に白いような……うーん」

周りの隙間も白いがこの隙間是不自然に白いような気が……。

僕は左手に懐中電灯を持ち、一週間前に切ったばかりの爪で白いような隙間をガリガリと削っていく。

爪の間には白い……ペンキみたいなものが入っていく。間違い無い。これは上塗りされている。

ガリガリと削ること数分後、

「……やっぱり、ここで殺されたのかもしれないわ……」

削り終わった後の隙間を見て梨子さんは呟く。  
確かにそうかもしれない。

削った後の隙間には、薄い広がった血があったから。

## 第五話

次の日……というか今日。またも梨子さんは家にお邪魔してきた。まるで僕んちに入るのが普通かのように我が家へと足を踏み入れる。その行動からは躊躇いなど感じさせない。感じさせて欲しかったけど。

両親は既に仕事へと行っていてまたも僕しかない状況。女の子と二人きりという超素敵イベントが今現在繰り広げられているというのに全くドキドキしないのは何故だろう。まあ、別にどうでもいいけど。

梨子さんをまず僕の部屋に入れ、下の台所から年から年所母さんが作り置きしている麦茶とコンビ二で購入したと思われるチョコチップクッキーを手に取り階段を上り、部屋のドアノブを回す。

「……何やってるの？」

「……男の子の部屋に来たときの定番を少々……」

梨子さんは四つん這いになり僕のベッドの下を覗き込みをしていやがった。残念だけど一兆年探してもエロブックは見つからないと思うぜ？

「どうしてよ？」

「だって僕は動画派だからね」

そう携帯電話を駆使して思春期男子が見るであろうエロ動画を見ているのだ。変なサイトに引っ掛からないように気を付けている人は多いはず。

「なるほど……だからエロ本のエの字も無かったわけね。理解したわ」

「そっか、理解してくれてありがとう。お礼に窓からのロープ無しバンジーを体験してもらおうかな」

「ちよっとちよっと！ それはお礼じゃないわよ！？ ヘタしたら死んじゃう！」

「それは仕方がない犠牲なんだよ……」

「仕方がなくない！ そんな犠牲は出さなくてもいいのよ！」

やれやれ……、リアクションが良くて止まらないな。梨子さんを弄るとなかなか愉快になる。

おっと、こんな果てしなく中身の無い会話をしている場合ではない。

「……さて、本題に入ろうか」

「あの会話から良くもまあ真面目な空気を構築出来るわね……、昨日……というか今日。考えたのよ、笹木高義の事件の犯行手順を」

予測していた言葉が梨子さんの口からハッキリと発せられた。

僕も一応考えてはいるのだが、ここは梨子さんの話に耳を傾け黙するしよう。

「笹木高義は自殺ではない。他殺ね。事件があつた日に笹木高義は誰かに呼ばれ屋上に行った。そこで犯人に殴られ、自殺に見せかけるために落とされたのよ。殴られた際に地面に付着した血は染み込んで取れなかった為、ペンキか修正ペンかなんかで消した。隙間の色は白いから誤魔化せると思ったって所ね」

わああ。なかなかの推理だね。だが、その推理には穴がある。

まず、笹木高義を屋上を連れ出すために使用した伝達手段。簡単な物はまず手紙。犯行日に朝早く来て笹木高義の下駄箱に手紙を入れればいい。まさか手紙を周りに言いふらすような事をする可能性は低い。

その以外ならばメールだ。しかしメールは着信履歴が残る。仮に消したとしても携帯会社にメールをした痕跡が残る為にかなり危険な伝達手段と言えるだろう。

次に殴った凶器と笹木高義を屋上から落つこととした理由。

撲殺するきだったのならば別には落として自殺に見せ掛ける意味が分からない。ただ皆の目を屋上から落ちてきた笹木高義に仕向けたかったのか……？

それに何より証拠が一つも無い。

僕は思ったことを全て梨子さんにぶつけると、梨子さんは力力オー○○パーセントのチョコレートを食べたかのような（僕は食べたこと無いけど）表情を浮かべた。

「むう……そう言われると辛い所があるわね」

唇を尖らせ不満げにする梨子さんはメチャクチャ可愛いと思った。冗談だけどね。

さて、またも八方塞がりだ。別に僕は犯人を捕まえて学校のヒーローになりたいわけではない。ただの興味本位だ。正直に言うとな別に誰が死のうがどうでも良いとさえ思っている。父と母に不幸が起きても涙一滴も流さない自信がある。だって悲しくないから。



うーんうーん、と唸っていた梨子さんだったがいきなり立ち上がり僕の顔を見た。

そんな見つめないでくれよ。照れちゃうじゃないか。冗談だけどね。

「今日は帰るわ。何だか話が進まなそうだし」

そう言つてクッキーをちゃっかり平らげた後、僕の部屋を出て行き家も出ていった。勝手に来て勝手に帰って行った。

やれやれ。

僕は額に右手の指を添えながら溜め息をつく。

さて、そろそろ僕も行動を起こすか。

またには正義のために動いても罰は当たらないでしょ？

## 第六話

外は快晴だった。

春独特の暖かみがある空気がこの地域を支配していた。なかなか心地よく、このまま公園などを闊歩していても構わないのだが、それでは僕が外出した意味がない。晴れた日や雨の日に関わらず僕の休みの日の過ごし方は大体決まっていて、インドア派な僕にとっては家でゴロゴロしながらのんびりした方が好ましい。

そんな僕は昨日歩いた道を再び歩いている。

道は車二台分が走れるくらいの幅で、電信柱の近くには誰かが不法投棄したと思われるゴミ袋が数個誰にも気にされる事もなく鎮座なさっていた。

しかも面白いのが、この辺ってまるで迷路のように曲がり角が沢山あったり。初めてここに来た人は一〇〇パーセントとは言わないが、九〇パーセント以上の確率で迷うこと間違い無い。

ポケットに手をつ突っ込みながら、闊歩している影響で発生する心地よい春の向かい風を前進に受けながら全身していると（あれ？ 逆？）曲がり角に差し掛かろうとした刹那に誰かと軽くぶつかった。

ポケットから手を出し、少し後ろによるめく。

そしてぶつかった曲がり角に目を向けると、そこには女の子がいた。曲がり角でぶつかった女の子とは、二次元の世界では恋愛フラグが建ったり、建たないにしろ物語にとっても重要なシーンな事が多いが、それは知らない女の子とぶつかった時のお約束シーンである。

僕はこの女の子に身に覚えがあった。

「あ、すいません……あれ？ 惣介さん？」

「ハリーじゃないか。久々だね」

「ハリーじゃないよっ！ 玻璃だよ！」

頬を膨らませ、小さくその場で地団駄を踏み抗議の声を上げるハリ  
ィ。

東和玻璃。

地元の中学校に通う中学二年生だ。

高校生である僕が何故女子中学生と知り合いなのかはなかなか深い理由があつたりする。

三年前に連続誘拐事件が世間を悪い意味で賑わしていた頃、僕は偶然にもハリーを誘拐しようとした犯人グループを見てしまい、この時僕の中にある正義心を抑えられずつい無意識下で身体が動いてしまい、犯人グループを千切っては投げ、千切っては投げの連続。僕のおかげで事件は解決し、ハリーに好かれた瞬間でもあつた。興津惣介くんマジヒーロー。冗談だけだね。

本当は中学生の時に小遣い稼ぎに行った家庭教師で、その時の生徒がハリーなんだよね。

自慢ではないが、僕は成績についてはかなり優秀な方だと思う。よく考えると何でテスト前になっていきなり勉強し始めるんだろうと思う。勉強なんてせずともテストは授業で習った場所が出るわけだし、その時に全部覚えれば別にテスト前になって、焦りながら勉強する必要は無いんじゃないかと思うんだけど、家庭教師をやっていた時に生徒であるハリーに僕が思っている事を全て言つと、『それは頭が良い奴の言い分だろうがバカヤローっ！』と涙ながらに訴えていたような。

閑話休題。

軽く後頭部を人差し指で掻きながら僕は口を開ける。

「ハリー、どうして今の時間帯に制服姿でここを歩いているの？  
もしかして君の学校は大学並みに自由度が高いのかい？」

「あー……いやあ、ちよつと色々あります」

アハハハ、と乾いた笑い声を上げるハリー。

「はあ。こいつ寝坊しやがったな。家庭教師時代にも仮眠取りたい  
と言ったから、余裕もあつたし寝かせたらそのまま夢の中から脱出  
する気配も無く、そのまま夢の中からどんなに話しかけようと、音  
を遮ったかのように眠り続けたのだ。  
寝付きが良すぎるのも考え物だなあ。」

「惣介さんは学校はどうしたの？」

「最近ニュースでやってなかった？ 僕の通う高校で投身自殺した  
影響があつて今は休校中」

「ああ……」

思い出したのか、顔を小さく縦に振りながら納得した。

「それで、ハリーは学校行かなくても大丈夫なの？」

「もう諦めてるよ……だけど、行かなくちゃいけないし……まあ、  
いいや。じゃあね、惣介さん」

あの分だと、かなりの回数遅刻しているのだろう。妙に小さく見え  
る背中を見送るように見ながら、背中が見えなくなったのを確認し  
た後、再び足を進めた。

さて、のんきに歩いていくと徳山香織さんの家まで着いた。  
インターホンをポチッと押す。

ガサガサと機械音が聞こえてきたかと思うと、女の人の声が聞こえてきた。

『はい、どちら様ですか？』

鼻声だったが、昨日の声とは違う声。

「ども、警察の者ですが、ちょっとお話願いますか？」

冗談を恰も真実を言っているかのような声色でインターホンに話す。

『警察……ですか？ ……わかりました』

プツンと、インターホンから切れる音が聞こえてきたかと思えば、徳山家のドアが開く。

「お待たせしました……結構若いですね」

「はい、よく童顔刑事と呼ばれていますから」

冗談だけだね。

徳山香織さんは薄いピンクと白のパジャマ姿で、多分大事を取って寝かせられているのだろう。

耳にかかるかかからないかという茶色のセミロング、今時の女子高生だ。

「ちょっと話があるんで上がらせて貰えませんか？」

「家に……ですか？」

渋った表情の徳山香織さん。当たり前だ。僕だって、君の立場ならばそんな顔になるだろうな。

「何か不都合な点でもあるんですか？」

「いえ……わかりました。お上がりください」

こうして僕は騙してだが徳山香織さんの家に入ることになった。この際、庭にいる犬が吠えまくっていたのはちゃんと仕事をこなしている証拠。僕はある意味不審者でもあるからね。

玄関を入り、少し真っ直ぐ歩くと二階へと続く階段があつて右には茶の間。茶の間を抜けて左手にはキッチンがある。

僕は茶の間に座り込む。徳山香織さんはキッチンに向かうとしていたが、病人にそんな事をやらせるわけにもいかないので、彼女を引き止め、普段食事の際に使われているかもしれないテーブルを間に挟み徳山香織さんは着席する。

さて、聞くこと聞かないとな。

「ええと……名前はなんて言うんですか？」

「おっと失礼。自己紹介がまだでしたね。僕はこういう者です」

財布の中から一枚の白い小さな紙をテーブルに置き、白い紙を指で徳山香織さんの手前まで滑らせる。白い紙を手取る徳山香織さんはジッと視線を向ける。

「『興津了介』さん……ですか」

「はい、興津了介です」

冗談である。興津了介は父の名前で、白い紙というのは父の名刺を一枚拝借したもの。

「あの、警察の人には話すことは話したんですけど」

「実はですね、今日の調査で屋上に血痕があったことが明らかになりました、生徒で唯一の天文部、つまりあなただけが屋上に行ける人物なんですので、事件が遭った日に何をしていたか教えてくれませんか？」

嘘は言っていないはず。

人差し指で顎辺りを掻きながら、

「……分かりました。私は事件が遭った日は風邪で休んでいました」  
「それを証明する人間はいらっしゃいますか？」

「お母さんなら……」

「なるほど。では、あなたの部屋は一階ですか？ 二階ですか？」

「何が言いたいんです？」

「ここから学校までは徒歩五分くらい。合間を縫って学校に行くこ

とだって可能性も有り得なくはない」

少しイライラし始めているのか、眉間に軽く皺を寄せながらこちらに目を向けていた。

「私の部屋は二階です。窓から飛び降りない限り無理です！」

「飛び降りたら出来るじゃないですか。カーテンを下に下ろしてロ―プ代わりに出来るかもしれない」

「……では、私の部屋見てみますか？」

「是非お願いします」

よく徳山香織さんはキレイだな、と内心かなり感心しながら僕は彼女の小さい背中を見ながら階段を歩き、右手にある部屋へと入っていく。

僕は思わず「おゝ」と呟いてしまう。

徳山香織さんの部屋は熊と猫のぬいぐるみが窓側に置かれている以外にはあまり僕が想像していたような部屋ではなく、星に関する本や望遠鏡があるくらいで、結構シンプルな部屋だった。

僕はぬいぐるみが置いてある窓際に歩いていき、白いレースを手でどけて窓から下を見る。

うーん……。

「どうですか、無理でしょう？」

してやっつたりの表情でこちらに向く。

カーテンも皺も無く、強い力で握り締められた形跡も無い。



「うん、無理ですね」  
「そうでしょう?」

完全勝利を収めた主人公のようにニヤリと嫌な笑みを浮かべながらベッドに腰掛ける。

もう一つ、もう一つ訊かなくてはならないことがある。」「……本当にあなたが屋上に上げられるんですか?」

「どういう事です?」

「天文部以外にも屋上の鍵を借りれる生徒はいらっしゃいますかね?」

「うーん……、居ないと思いますけど。あつ、そう言えば関係無いかもしれないですけど、私が一年生の時に屋上の鍵を無くした事があるんですよ」

「鍵を無くした?」

「はい、友人と冬の空を見ていた時に無くしてしまったんです」

友人と……ね。

「友人とは何人と見ていたんですか?」

「一人です」

「鍵を無くした際に友人は疑わなかったんですか?」

「いえ、軽く何処にあるか知らない、とくらいしか訊いていませんでした。鍵なんて盗んでも得することは無いと思ひまして」

……理想的には友人の名前も聞く事なんだけど、警察はそこまで聞いたりしないと思う。だから止めておこう。

閑話休題をするように僕は話題のベクトルを変化させる。

「君と笹木高義さんとは同じクラスでしたね？」

「はい、そうですけど」

「笹木高義さんは恨みを持たれたりする人間でしたか？」

「……あまり評判は良いとは言えなかったですね。普段は猫かぶっているから評判は広がりにくい人でしたけど、二股……いや、三股をしていた、みたいな噂がクラス内にありました」

イケメンでルックスが良く女子の人氣が高い人間というのが笹木高義であつたが、自分のルックスを最大限に生かして女子生徒に手を出していたらしい。

「……由実も可哀想だったな」

「由実？」

ぼそりと呟いた彼女の言葉を僕は聞き逃さなかった。

「由実とは？」

「……さっきの冬の空と一緒に見ていた友人ですよ」

俯くように、語尾が薄れながら言う。

僕はその様子を黙って見ていた。その様子から見ると、由実という彼女は笹木高義の二股三股していた彼女の一人なのかもしれない。可哀想という意味はいろんな意味に取れる言葉であり、お金が無くても可哀想。怪我をして可哀想。

そして今回のケース。

彼氏である笹木高義が死んで悲しんでいる意味で可哀想なのか、こんな男と付き合うことになってしまったことに関して可哀想なのか、僕にはわかりかねる。

「……では、そろそろ失礼させてもらいます」

「あ、はい」

部屋を出て、階段を下り玄関に置いてある靴を履き、玄関の扉を開けようとした瞬間、徳山香織さんに呼び止められた。

「あの、警察の人って制服を着ないんですか？」

今更かい！ とツツコミたくなつたが、言葉を胃袋の中に吞み込む。最初に考えていた言い訳を言う。

「ドラマとかで見たことない？ ある程度以上の階級になつたら刑事って私服オーケーなんですよ」

よくわからないけど口から出任せ。

本当にこうなのかは不明。

「へえ、そうなんですか。知りませんでした」

納得してくれたようだ。僕はすたこらさつさと徳山家を出て行った。ちなみにまた犬に吠えられた。動物というのは人間の本质を見抜くというが、やっぱりこの犬は優秀なようだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8832z/>

---

嘔吐き少年と探偵部

2012年1月14日17時53分発行